

算命学中庸

【初年】 40回目

40回目の授業はこのページからです。

授業科目 【十二大従星力学】①

・【初年】40回目【十二大従星力学①】01

□ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく）①回目

算命学の「強弱をみる技法」は、大きく二分しますと、
「旺相休囚死法」と『十二大従星力学』があります。
どちらもその人物が「強いのか」「弱いのか」を見るもの
なのですが「旺相休囚死法」に出てきたように「空間と
時間がともに揃わないと強弱は語れない」という考え方は
おなじです。

👁️ 十二大従星力学は『十二大従星表』をつかいます。

『十二大従星表』

- ① 日干から年支を見て 第三従星
- ② 日干から月支を見て 第二従星
- ③ 日干から日支を見て 第一従星

		第三 従星
第一 従星		第二 従星

十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星

「旺相休囚死法」は（月支）を基準にしました。
家系の場所（月支）を基準にして、一家のなかにおいて、
「誰が強い」「誰が弱い」というチカラ関係をみました。

旺相休囚死法 ⇒ （月支）を基準



家系のチカラ関係

⇒ 十二大従星力学は「日干」を基準にします。

宿命のなかで「日干」は自分自身です。

十二大従星力学は自分がどのくらい強いのかをみます。

十二大従星 ⇒ 日干を基準



本人の性格

性格的に「気が強い人なのか」「気が弱い人なのか」と
いう「強弱」は十二大従星でみます。

☞「旺相休囚死法」と『十二大従星力学』の強弱の見方は異なります。

つまり、性格的に気が強い人であっても、家のなかでは
〔母親にさからえない〕〔妻には頭が上がらない〕そういう状況もあります。

反対に、性格的に気が弱い人であっても、家のなかでは
〔威張っている〕〔自分の意見を言い張る〕という状況もあります。

「家系のなかのチカラ関係」と『本人の性格の強弱』は異なります。

『十二大従星力学』は“本人の性格的な強さ”といえます。それに加えて、本人のエネルギーの強弱もみてゆくようになります。

十二大従星 ⇒ 「日干」を基準



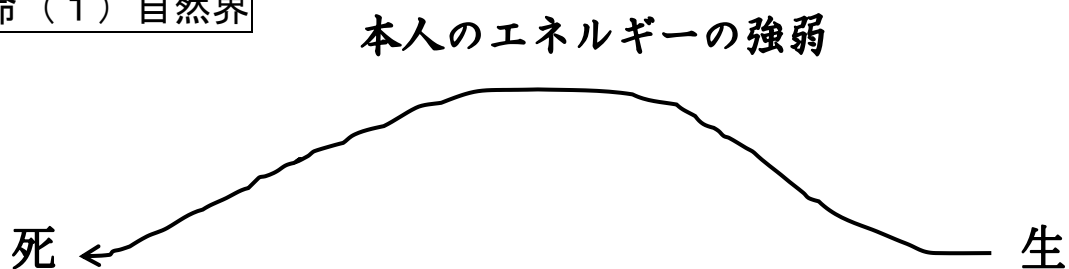
本人の性格

ここで論じている“エネルギーとはなにか”については、この後にでできます。そこで説明をします。

⇒ 人間の一生を〔例え〕にして“エネルギーの強弱”を考えます。

人間が生れてから死ぬまでを考えると、大雑把^{おおざっぱ}にみて、エネルギーの強弱は、おおまかに描^かいた山の起伏にたとえることができます。

宿命（1）自然界



赤ん坊はとても力が弱い存在ですが、だんだん成長して小学生になり、中学生になって、高校生から大人になるに従って、体も大きくなり、力も強くなって、精神も逞^{たくま}しく成長するとともに、世の中のさまざまな道理^{どうり}を身につけていくようになります。

自分で生きるチカラもだんだんと備わってきます。

参考・道理〔ものごとのそうあるべきすじみち〕

体力・知力だけの話ではなくて、自分が生きて行くための総合的なチカラの推移を大雑把に描くと、宿命(1)のような姿にたとえることができるでしょう。

参考・推移〔時が経過してゆくこと。時のうつりゆくこと〕

最初はどうなたでも生きていくチカラは弱いです。

赤ん坊は体力も弱いし、食べ物を自分で食べることができません。親の世話にならなければ生きてゆけません。

幼児期から、だんだん、だんだんと成長するに従って、自分のチカラで生きることができるようになってきて、今度は世の中へでて、仕事始めたり、結婚したり、さまざまなことを経験していくうちに、世の中で活躍できる年代で自分の頂上を見て、そして——

晩年期に入ると、肉体も精神も少しずつ衰えて終焉を迎えます。

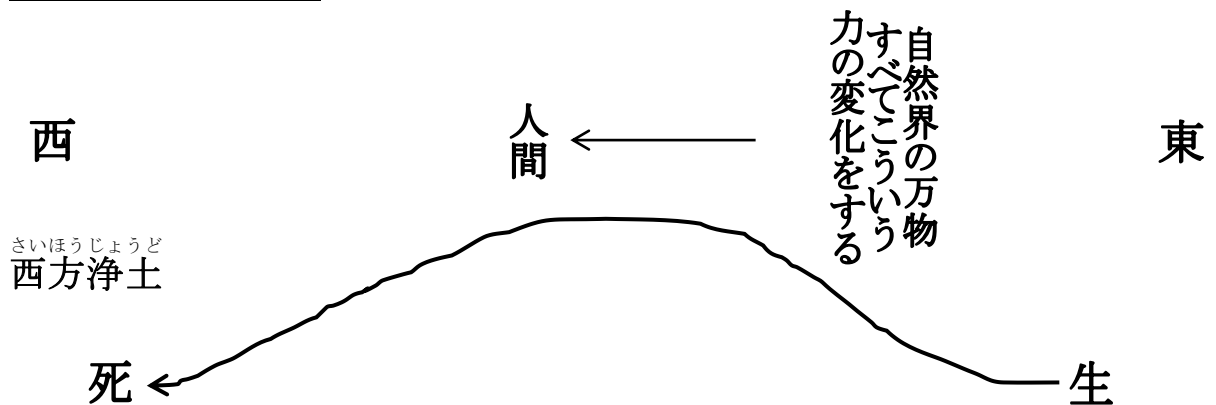
このようなチカラの強弱の推移は、人間だけに限らず、自然の万象にも、これとおなじことがいえるのではないかと考えたわけです。

参考・終焉〔死に臨むこと〕

参考・万象〔天地に存在するあらゆるものごと〕

参考・万物〔天地間・宇宙に存在するすべてのもの〕

宿命（2）自然界



自然界の万物は、おおざっぱに観て、このようなチカラ・エネルギーの変化をするはずです。

自然界の一員である人間もおなじです。

樹木も最初から大木ではありません。最初は種から発芽して、それが小さな苗木になり、少しずつ成長して年輪を重ね重ねて、天に聳える大木へ成長します。

その大木も樹齢何百年と重ねる過程で、少しずつ生氣が衰えて、幹のチカラもだんだん弱ってきて、最後は枯れて終焉を迎えるでしょう。

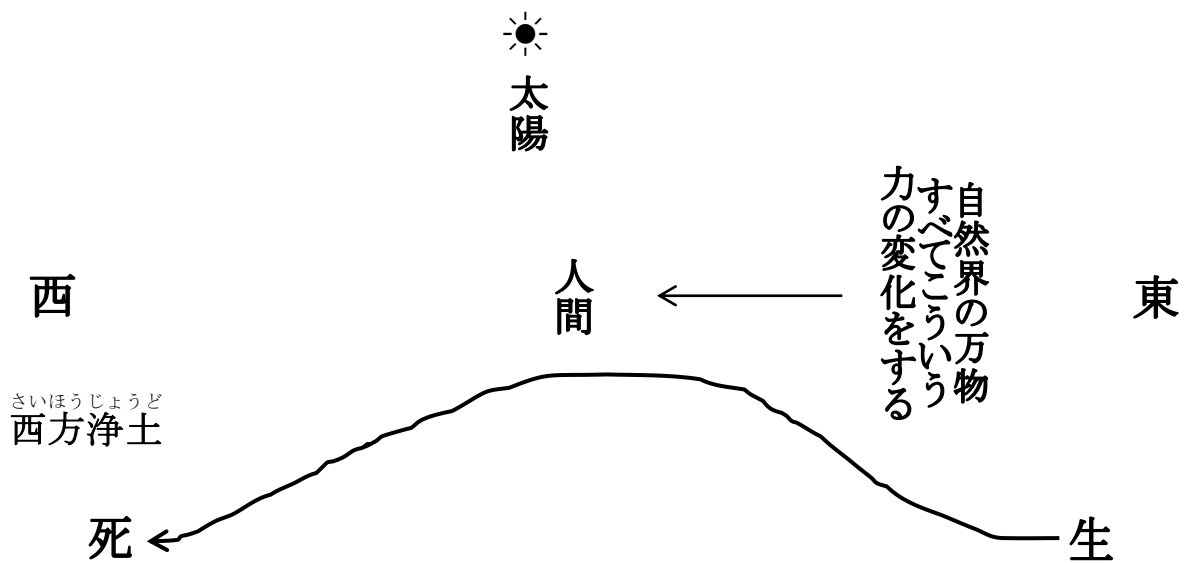
「樹齢数百年の御神木が台風で根こそぎ倒れた」と報道もありますが、仕方のない自然界の事象といえます。

西方浄土〔人間界から十万億の仏土をへだてた西方にあると説かれる〕

参考・生氣〔いきいきした気力・活気〕

参考・仕方〔なにかに対処すべき方法〕

宿命（3）自然界



自然界の万物は、おおざっぱに観て、このようなチカラの変化をするはずです。

1年間を通して観れば、1年が始まったときの立春はまだ寒く、太陽のチカラ（陽射し）は弱いですが、だんだんと強くなって真夏の太陽となり、秋の季節を迎え、冬になると、太陽のチカラは衰えていきます。

このような変化の姿は、基本的にどのようなものでも、時間の経過のなかに存在していると考えたのです。

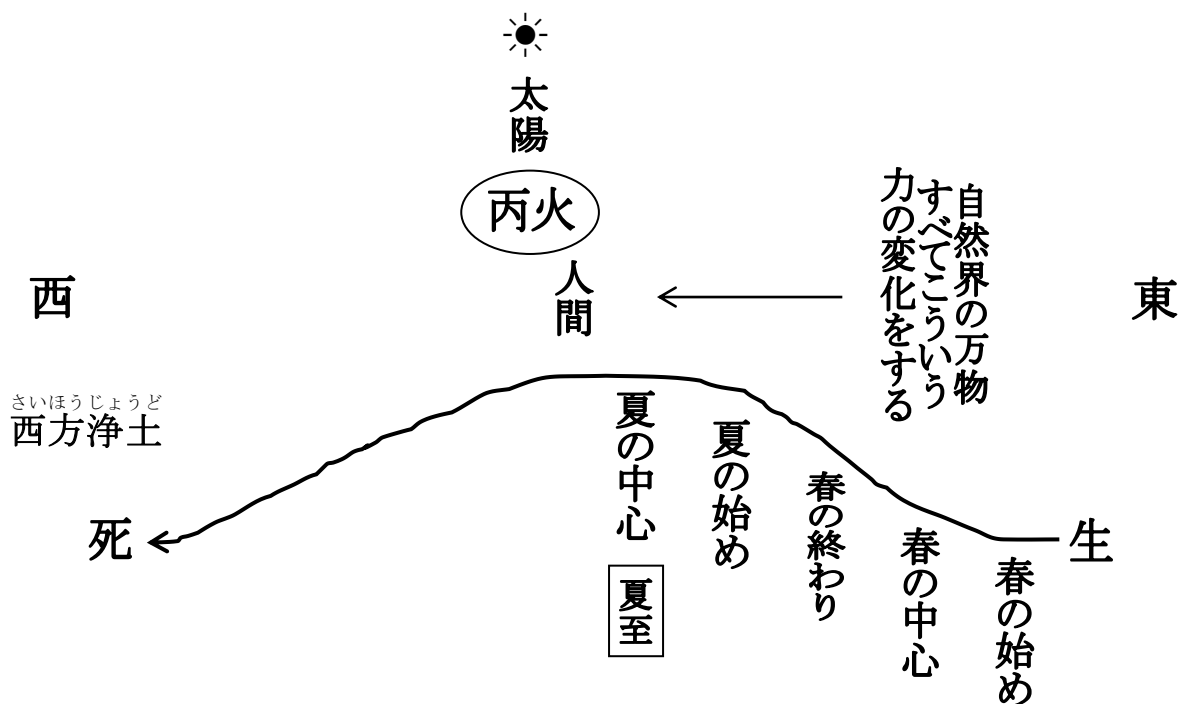
〔この変化の流れを1年間かけて行っている〕と、古代の学者は考えたわけです。

太陽の寿命はあと50億年ほど……との説もあります。

〔たとえば〕ここでは(太陽)を加えました。

1年間といいましたけど、わかりやすく、春の始めから書きました。十干「丙」は太陽を意味します。

宿命（4）自然界



1年が始まったばかりの頃の太陽は、まだ寒いし、陽射しのチカラも弱く、日照時間も少ないです。

春の中心が来て、春の終わりが来て、夏の始めが来て、夏の中心が来ると、太陽のチカラはどんどん強くなってきます。

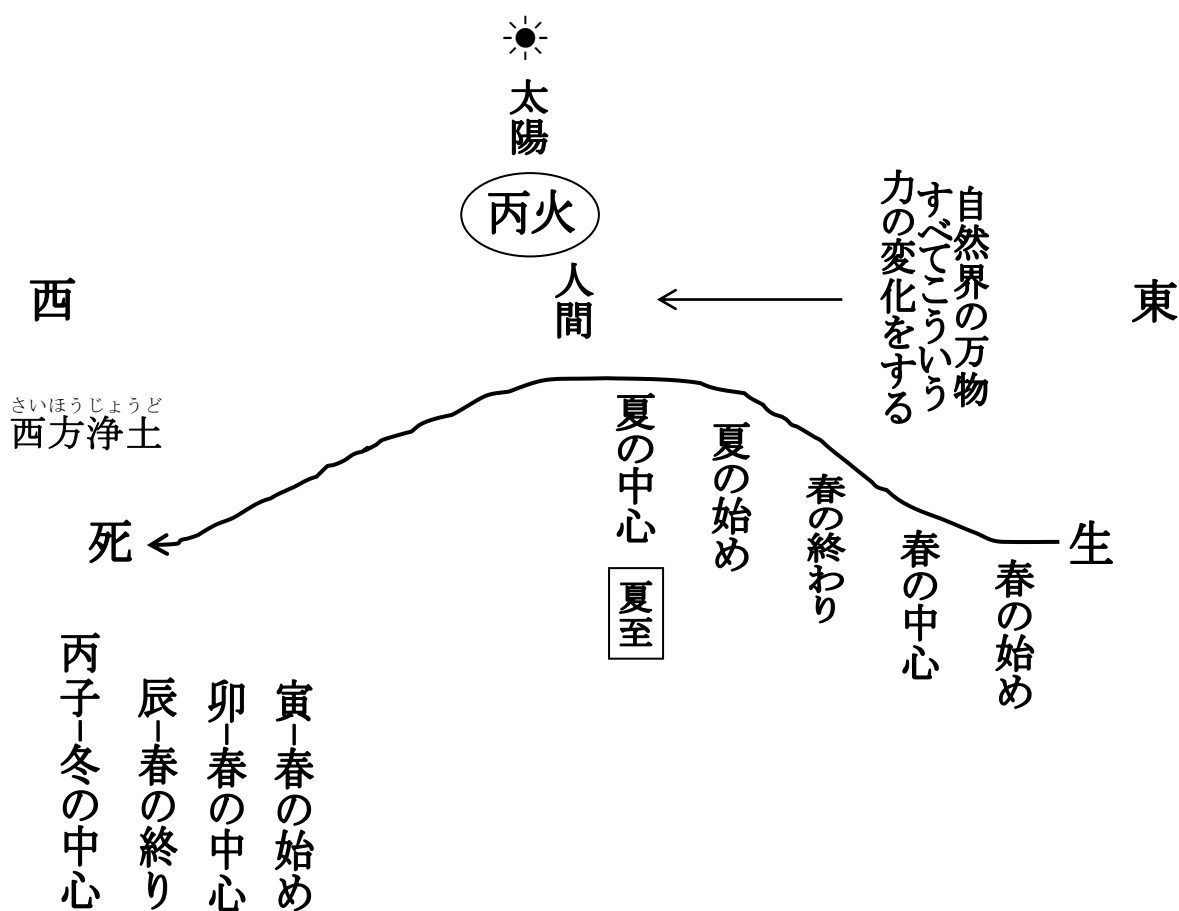
夏の中心を迎えると、暦の上では 夏至 げし があります。

夏至は太陽のチカラが最強になるところです。

夏の中心を過ぎると、秋が来て、冬が来てというふうにチカラが衰えていきます。

このように見てきますと、人間の一生も、太陽の一生も基本的におなじような変化をするのではないのかと考えたわけです。そしてこの事象を人間の宿命に^あ当てはめるとつぎのようにいえるわけです。

宿命（5）自然界



太陽「^{へい か}丙火」に焦点を当てて考えると、日干「^{へい}丙」人物が、地支に（^{ね すい}子水）（^{とらぼく}寅木）（^{たつど}辰土）という三支を^{さんし}もって

いたとします。

（子水は冬を中心）（寅木は春の始め）（辰土は春の終わり）の十二支です。

日干「丙火」の人が、（子）と（寅）と（辰）をもっていると、丙火の人物は（冬を中心のチカラ）（春の始めのチカラ）（春の終わりのチカラ）を備えていることになります。

☞ あとで技法として学びますが、その（十二支）を合計すると「どの程度強い太陽なのか」ということを判別することができます。

宿命（5）自然界 は——1年間（12ヶ月）を自然界がやりゆく姿とします。それを「たとえば」日干「丙火」の人物の宿命に当てはめて数え合わせると、この太陽はどの程度のチカラをもっている太陽です。という判別ができます。『十二大従星』はそういう見方が基本になっています。

ここでは『太陽の **1年12ヶ月** というチカラの推移も、人間一生の推移もおなじような変化する』と言っているわけでは。 参考：推移（時が経過してゆくこと）

それゆえ『十二大従星』は人間の一生を『12の時代』に区分くぶんしたものである。参考：区分〔くぎってわけること〕

そのように考えておいてください。

『十二大従星』人間の一生を『十二の時代に区分』したもの。

宿命で『十二大従星』を観るときには、この宿命の樹木は〔春の樹木だからどんどん成長する強い樹木〕とか、この宿命の樹木は〔地支が秋とか冬の十二支ばかりなので弱い樹木〕だとか……そのように観てゆきます。

樹木のチカラの推移すいいも、太陽のチカラの推移も、人間が母親の胎内たないで育はぐくまれて赤ん坊として生まれ、最後は終焉しゅうえんを迎えるチカラの推移すいいも、自然界の変化とおなじような過程たどを辿って行く。そのように考えています。

それゆえ『人間の一生を十二の時代』に区分して、各人の宿命をこれに当てはめて観ていくわけです。

参考・推移〔時が経過してゆくこと。時のうつりゆくこと〕

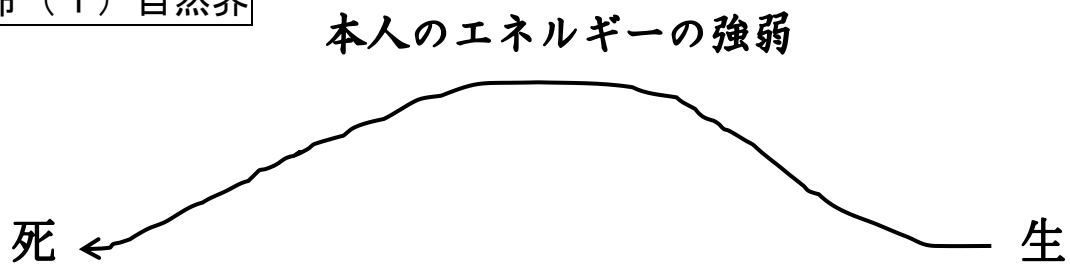
参考・区分〔区別して分けること。全体をいくつかにくぎってわけること〕

参考・辿る〔ある方向へ進んで行く〕

⇒ 『十二の時代』の違いを説明します。

＊ 天報星（てんぽうせい）胎児の時代の星です。

宿命（1）自然界



先ほど、わかりやすいように、人間の一生を山の起伏にたとえまして、**宿命（1）自然界**のように〔生から死〕までと書きましたが、この世に生れる前の胎児の時代（母親のお腹に胎児としている時代）から、その人物の^き気（その子供の気）は、すでに始まっていると考えています。

どんな人でも胎児の時代を通らないと、この世に生れて来ないわけです。

“胎児の時代は無かった”という人はいないはずです。

母親の胎内にいるときから、その人物の人生は動きはじめている。そのように算命学では考えます。

“胎児の時代から始まる”ということで、『十二大従星表』も、胎児の時代の星『天報星』から記載されています。 02 ページ

＊ 天印星（てんいんせい） 赤子・赤ん坊の時代です。

天印星は赤ん坊の時代です。

この世に生れたばかりの時代です。

＊ 天貴星（てんきせい） 児童^{じどう}の時代です。

算命学では『天印星』赤ん坊の時代と『天貴星』児童^{じどう}の時代は——ここを“境目”として区切ります。

それは「物心^{ものごころ}がついたら児童^{じどう}になる」という基準^{もう}を設けて区切っています。 参考：物心〔人情・世の中の物事を理解する心〕

多少は子供それぞれの個人差はあると思いますが……、
だいたい3歳か4歳位になれば物心がつくはずです。

もっと早くに物心がつく子供もいるかも知れませんが、
物心がつかないうちは赤ん坊とみなします。

物心がついたら児童（子供）とみなします。

それゆえ『天印星』と『天貴星』の時代を区切ります。

皆さんも赤ん坊の頃の出来事は記憶にないでしょう。

「お母さんすごく難産だったから、わたし産道^{さんどう}を通るとき苦しかったのよ……」とか、そういうことはまったく覚えていないですよ。（覚えている子供もいます）

0歳とか1歳とか、赤ちゃんのときに、すごい熱をだし

して大変だったことを、親が子供にいうことはあっても、子供はまったく記憶にないでしょう。

なぜ記憶がないかといえは「物心がついていない」からだと言命学は考えています。

でも、3歳か4歳か、その位になると物心がつきます。物心がついた^{あと}後の記憶は残っているはずで。

＊ 天恍星（てんこうせい）（てんぴかせい）少年の時代で。

児童の時代と少年の時代は、どこで区切るかといえは、思春期に入ると少年の時代とみなします。

天恍星の少年は思春期に入った時代で。言命学では、思春期に入ったら児童ではない。少年とみなします。

思春期に入る前の子供と、思春期に入っ後の子供では根本的に性格も考え方も違ってくるとして、人間としての時代が違うと考えています

小さい頃には、親の後をついて来て（お父さん大好き）

（ママ大好き）と言っていたのに、思春期に入っ途端に、親と口をきかなくなったりします。

途端に、親と口をきかなくなったりします。

子供の時代と思春期の時代とでは、大きな違いがあるからです。

＊ 天南星（てんなんせい）青年の時代です。

青年の時代——ここから大人になります。

天南星の青年は大人の時代です。その第一歩です。

＊ 天禄星（てんろくせい）^{そうねん}壮年の時代です。

この星は大人でも“^{ちゅうねん}中年”と呼ばれる。そういう時代だと考えてください。

^{そうねん}壮年は働き盛りです。若者ではないのです。

それゆえ“壮年”という言葉をつかっています。

天禄星の年齢は目安ですから、多少個人差はあります。

〔30 歳〕〔40 歳〕になったから、もう壮年だというふう
に考えていません。

壮年の1つの目安としては“働き盛り”です。

＊ 天将星（てんしょうせい）家長の時代の星です。

天将星は家長の時代というのは、人生の頂点という意味です。人生の頂点・山の頂点です。

その年齢は人によって個人差があります。

〔たとえば〕サラリーマンでしたら、50代という年齢はその人の一生のなかでは、最も高い地位についているであろう。とおもわれる時代の場合が多いでしょう。

〔60歳〕で定年退職だとすれば、それまでの50代における最後の10年間は、その人物の人生の過程において、1番高い地位に就いていて、1番活躍している時代に相当するはずです。

それが天将星の時代です。

当然一家のなかで、家長の立場にあるはずです。

それゆえ“家長の時代”という名称がついています。

現在^{いま}は平均寿命が長いですから〔60代で人生の頂点〕という人も当然いるでしょう。そうであれば、その人物の人生の頂点は60代ということになります。年齢にはそれほどこだわらなくてよいのです。ここで説明している考え方のほうが重要だとおもってください。

＊ 天堂星（てんどうせい）老人の星です。

これは引退後における老人の時代と考えます。

サラリーマンの人などで、定年退職した^{あと}後、あるいは、
自営業の人でも、〔65歳〕から年金をもらって、老後とい
われる時代の暮らしに入ると、天堂星という星の時代・
老人の時代と考えます。

＊ 天胡星（てんこせい）（てんゆめせい）病人の星です。

天胡星の病人は〔死の^し病^{やまい}の時代〕という意味です。

死の病の時代ですから、老人とも呼べない時代です。

わかりやすくいえば、病床にあって、寝たきりの状態に
なって、あとは死をまつだけの姿です。

そういう時代を、病人の時代と位置づけています。

死の病の時代ですから、ここが^{げんせ}現世の最後です。

＊ 最後に^{さんせい}三星残っています。

天極星（てんきょくせい）死人の星です。

天庫星（てんこせい）（てんくらせい）^{にゆうぼ}入墓の星です。

天馳星（てんそうせい）あの世の星です。

この三星^{さんせい}はいずれも“死後の時代の星”に相当します。
算命学は、人間がこの世で死んで、すぐに人生が終わる
のではない。と考えています。

死んだ後も、その人の「気^き」が「魂^{たましい}」が、〔死人の時代〕
〔入墓^{にゅうぼ}の時代〕〔彼世^{あのよ}の時代〕という三星の時代に残存^{ざんぞん}し
ていると考えています。

参考・残存〔残りにとどまること〕

三星の違いについては、説明に時間を要しますので、詳しくは、
各星^{かくせい}のところで説明します。

〔死んだ後の時代〕は、どのようになってゆくのか——と
いう考え方が算命学にあります。

人体図には、第三従星・第二従星・第一従星の場所があ
ります。そこには『十二大従星』が三星^{さんせい}載ります。
各人の人体図に載っている三星がもつ意味合いに基^{もと}づい
て、その人物を観てゆきます。

各人それぞれの宿命に当てはめて、その人物の性格とか、
その人物がもつエネルギーなどを占っていくようになります。
ます。

参考資料

十大主星

貫索星（守備）陽

石門星（守備）陰

鳳閣星（伝達）陽

調舒星（伝達）陰

祿存星（魅力）陽

司祿星（魅力）陰

車騎星（攻撃）陽

牽牛星（攻撃）陰

龍高星（習得）陽

玉堂星（習得）陰

十二大從星

天報星（胎児）

天印星（赤子）

天貴星（児童）

天恍星（少年）

天南星（青年）

天祿星（壮年）

天将星（家長）

天堂星（老人）

天胡星（病人）

天極星（死人）

天庫星（入墓）

天馳星（彼世）

02 頁『十二大従星表』に記載されている『各星のエネルギー』

『天報星』	胎児の星	3 点
『天印星』	赤子の星	6 点
『天貴星』	児童の星	9 点
『天恍星』	少年の星	7 点
『天南星』	青年の星	10 点
『天禄星』	壮年の星	11 点
『天将星』	家長の星	12 点
『天堂星』	老人の星	8 点
『天胡星』	病人の星	4 点
『天極星』	死人の星	2 点
『天庫星』	入墓の星	5 点
『天馳星』	あの世の星	1 点

エネルギー値は点数であらわします

📌 『十二大従星表』の端^{はし}に点数を書き加えておくとよいでしょう。

🔍 2頁の『十二大従星』に記載されていますように、始めは『天報星』です。

📖 天報星（てんぽうせい） 胎児の時代

天報星 — 胎児

天報星といえば“胎児^{たいじ}の時代^{じだい}”と覚えてください。

『十二大従星』は各星が織り^おなす意味合いが重要です。

「十大主星」の授業をしたとき、各星が備えている本能の意味合いが重要でした。

『十二大従星』は“胎児の時代”とか“赤ん坊の時代”とか“青年の時代”その各星の“時代”が重要になります。
人体図に天報星をもっていたら、天報星がもつ時代の意味合いに相当する宿命です。

参考：織りなす〔様々な事柄が組み合わさり、ある状態を作り上げる〕

参考：相当〔資格・性質・時期・数料などが合致する〕

母親のお腹の羊水ようすいのなかで育はぐくまれている『胎児たいじの気き』と
生命いのちの存在を想像してください。

ほかのどの時代よりも、胎児という生命が備える顕著けんちょな
特徴があります。

それはどのようなことなのかと、思おもい巡めぐらしてください。
私たちには胎児だった時代があります。

参考：羊水〔子宮の羊膜を満たす透明な液体、なかの胎児を保護し、出産時に破水し
て、分娩を容易にする〕

参考：育む〔大切にいつくしみ育てる〕

参考：顕著〔きわだっていちじるしく、目につくさま〕

参考：特徴〔とくにすぐれたところ。特色〕

参考：部分〔着目する全体を分けて考えた一つ。全体のなかの一つ〕

参考：思い巡らす〔さまざまに考える〕

この胎児の時代がほかのどの時代よりも、すぐれている、
勝っている、といえる大きな特徴は、人間一生のうちで
最も大きく成長します。

自分の子供ではなくて、親戚の子供とかに、2年・3年
ぶりに会ったりすると、「〇〇ちゃん、チョット見ないあいだ

に大きくなったわねえ」とかいいますよね。

子供はどんどん成長します。

1年も逢^あわないと、急に成長したかのように見えます。

ところが、子供の成長と胎児^{たいじ}の成長を比較したら、比較にならないですよ。

胎児のほうは奇跡ともいうべき大きな成長です。

最初は顕微鏡でなくては見えないような細胞が、母親の胎内で、わずか10ヶ月位のあいだに、3000グラム位に成長するわけです。何十万倍、何百万倍という成長率です。

このことからして、一生のどの時代と比較しても、これほど大きな成長を見せる時代はないのです。

言葉を替えると、つぎのように表現できます。

一生のうち最も大きな変化をとげる。

それが胎児の時代です。

見た目も大きく変化します。

最初は肉眼では見ることはできなかった細胞が、わずか10ヶ月位のあいだに、手足がきちんと整い、肉体のなか

に五臓がきちんと出来上がります。

何ヶ月かのあいだに、その姿はどんどん変化します。

これほど大きく変化する時代はほかにはないのです。

それゆえ、つぎのようにもいえます。

胎児（まだこの世に生命をうけていません）から、人間として生きている^{げんせ}現世の時代に比べれば不安定な時代です。

胎内で生存していても、分娩時に生命を宿して産まれて来るのかどうか不安があります。

もしかすると、なにかの事情で生命を絶たれてしまうかも知れません。その意味ではほかの時代よりも不安定です。

胎児が生命を絶たれなければ、3000グラムという偉大な変化を遂げて大きく成長します。しかし、そこに辿り着く過程には“不安定な時代”が横たわっていたわけです。

不安定な時代



変転変化の星



人生に変化が多い

天報星は“変転変化の星”とも呼ばれています。

天報星は最も大きく変化して、不安定な時代を経過^{けいか}して、生まれてくる星です。

それゆえ、天報星をもっている宿命は運勢の上でも変化が多いといえます。

波乱に富んだ人生といってもよいでしょう。

参考・横たわる〔進む妨げになって存在する〕

参考・変転〔かわりうつること。まったく違うほかの姿になること〕

参考・変化〔時間・空間的推移によって、物事の状態に違いが現れること〕

参考・経過〔物事のうつりゆく状態〕

☞ どのような変化なのか、それはわかりません。

〔たとえば〕仕事がたびたび替^かわる人生の変化なのか、結婚を何回もするという変化なのか、生き方自体、あるいは、人生観がどんどん変わるのか、そのことは天報星だけではわかりませんが、いずれにしても、普通の人よりも、変化が多い人生になります。

性格的にも“移り気”といえる変化が多いので、気まぐれなところがあります。

「たとえば」さっきは映画を観に行こうといったのに、
気が変わって、「やっぱりこれやめて、あっちにしようよ」
というふうに、とっさの思いつきで、目的を変えるとかの
性格になります。

参考・移り気「興味の対象が変わりやすいこと」

参考・気まぐれ「定まった考えがなく、その時々で、心が動かされや
すく、思いつきで行動するさま」

それゆえ、移り気で気まぐれな人物になるわけですが、
天報星をもつ人自身は意識してやっているのではなく、
悪気があって変化しているのではなく、自然に変化して
しまうわけです。

自然に気が変わってしまった。としか言いようがないわ
けです。

これがその人の“好^よさ”でもあるし、欠点にもなる質で
もあるのです。

それゆえ「よいとも」「悪いとも」いえないのです。

精神的に不安定な星

天報星の精神不安定は精神病とは違います。

この星をもつ人は、時期にもよりますが、もともと精神が不安定です。

ふつう世間でいうところの精神不安定は、何か悩み事があったり、普段ストレスが強かったりして、“精神が不安定になる”ということを指すとおもいますが、そうではなくて、もともと精神構造が不安定に出来ていると考えています。

それゆえ、気が変わりやすいし、考え方も変わりやすいのです。

朝——こうするといったのに、夜になると違うことをいい出すとか、そのような側面をもっています。

でも、これが本来の姿です。

☞ 人体図を書きました。

はすいけかおる

蓮池 薫 1957(s32)-9-29

そ が

曾我ひとみ 1959(s34)-5-17

	調舒星	天報星
禄存星	牽牛星	牽牛星
天堂星	石門星	天報星

	貫索星	天報星
牽牛星	調舒星	牽牛星
天報星	貫索星	天将星

曾我さんは、天報星が2つあります。

蓮池さんも天報星が2つあります。

『十二大従星』は人体図に3つしか載りません。

3つのうち、天報星が2つもあれば、半分以上を天報星で占めている人体図ということになります。

人体図に変転変化の星が2つあるというのは、算命学では『動乱の英雄』という呼び名がついています。

天報星2つ



「動乱の英雄」非常に波乱の多い人生

非常に波乱の多い人生になる可能性があります。

動乱の英雄といえ、見た目がよいようにおもえますが、
“あだ名”のようなものでして、本当に英雄になるのか
どうかわかりません。非常に波乱の多い人生になります。

算命学のなかで、特に波乱の人生となる典型的な宿命は
天報星を2つもつ人です。

天報星は1つあっても、普通より波乱が多い人生、変化
が多い人生になりますから、2つあれば、すごい波乱の
しょうがい生涯じんせいという人生になります。

参考：生涯〔この世に生きているあいだ〕

参考：人生〔人間がこの世に生きてゆくこと〕

☞ 拉致被害者の有本恵子さんは、すでに亡くなったと、
北朝鮮が発表している女性です。

有本恵子さんも天報星2つです。

有本恵子さんは北朝鮮で、石岡さんという男性と結婚し
て、その後に亡くなったといわれているのですが、石岡
さんという男性も天報星を1つもっています。

久米裕さんという方も、すでに亡くなったとのことですが、その人も天報星が2つあります。

横田めぐみさんも、天報星をもっています。

横田めぐみさんのお父さんも天報星をもっています。

拉致被害者のなかには、天報星をもっている人はとても多いです。

天報星を2つもつ人は“動乱の英雄”と呼ばれますが、動乱に巻き込まれる確率が高いです。

非常に波乱の人生ということは、動乱に巻き込まれて、波乱が多くなりやすいともいえるわけです。

拉^ら致^ちだけが全てではありません。

事故などにも要注意です。

交通事故に何回も遭^あってれば、それだけで波乱の人生です。

自分から事故を起こしてもおなじです。

運勢的に、事故とか事件とかに遭いやすいのです。

しかし、悪い事ばかりではありません。

〔たとえば〕蓮池さんは、中央大学に通っていて、学生時代に新潟に里帰りして拉致されました。

それで波乱の人生を歩んだわけです。

〔たとえばの話として〕このような人物が学校を卒業して、会社に入って人生を歩むとしたら、どういう会社に入社すれば、宿命に^そ沿うとおもいますか？

人生に変化・波乱が多い人物です。

つまり、波乱の宿命に適した会社というのは、変化が多い会社と考えるとどうでしょう？

つまり、転勤の多い会社、商社なんかが1番よいです。

2、3年ごとに世界のあちこちへ転勤させられるとなれば、それだけで変化の多い人生です。

そのような生き方は適合しています。

転勤の多い会社であれば、出世していくでしょう。

それは宿命に合っているからです。

転勤の多い会社には向く。

このことは、天報星1つの人でもいえます。

実際に転勤の多い会社に入って転勤族になれば、それだけで人生に変化が多い宿命を消化しているようなものですから、事件や事故に巻き込まれないようになります。それゆえ、人体図をみて、1つでも天報星がある人には、不安定な仕事がうまく一致します。

あっちこっちへと出張が多いのもよいです。

天報星が2つもあるのなら、とにかく変化の多い仕事を
すすめることです。

2010年に芸能レポーターの梨本さんは亡くなりましたが彼は天報星2つです。レポーターはあっちこっちへ行かなければ仕事になりません。

夜中だろうと、事件が起こる、醜聞しゅうぶんが起ったら張り込みをして、当事者にマイクを向けることもあるでしょう。そのような仕事は向いています。

なんらかの形で天報星の変化・波乱を消化しなくてはいけないということです。仕事で消化するのは最適です。

「若い人は未来がたくさん残っていて、可能性がすごく大きいから、若いときはいいよね」とか耳にしますが、

将来に対する可能性をいうのであれば、若い人よりも、もっと小さな子供のほうが、将来どんな道に進むのか、どんな人と結婚するのか、いろいろな可能性が残されています。

さらに可能性ということ突き詰めれば、生れる以前の“胎児”のほうが可能性は無限といえるほど広がっています。

^{いま}現在は、早ければ妊娠16週くらいで、胎児の性別がわかります。確認しやすいのは24週目くらいだそうです。

それが判明するまでは（男の子なのか）（女の子なのか）という両方の可能性もっています。

^{だいたい}墮胎は3ヶ月くらいまでということですから、3ヶ月という短期間のあいだに、胎児の生命がどうになってしまうのか、わからないわけです。

その意味を加味すると、最も未来に対する可能性を多くもっているのは“胎児の時代”であるはずです。

一生のなかで、将来に対する可能性を最大にもつ時代。

胎児の時代・特に6ヶ月くらいまでは、人間の一生のなかで、将来に対する可能性を最も多くもつ時代ともいえます。〔たとえば〕その時期を過ぎて性別がわかったとしても、胎児がお腹にいるときに、親としては（どんな子供が産まれて来るのだろう）（どんな顔かしら）（元気に産まれて来てくれるだろうか）いろいろ考えたりもするでしょう。そのように思い浮かべるのも、胎児がさまざまな可能性をもっているからです。

そうしますと、ほかのどの星よりも、可能性だけは多くもっている星です。

その可能性のなかにいろいろな才能を秘めています。

一生のなかで、将来に対する可能性を最大にもつ時代



多芸多才の質をもつ

そのことからして、多芸多才の質をもっている星です。

これも天報星の特徴の1つです。

補足すれば、種々の可能性と才能を秘めている星です。

色とりどりの可能性、才能を秘めている。

母親のお腹のなかにいる胎児ですから、海のものとも、山のものとも、決まっていない時代だからこそ、どのような生き方も可能です。

多くの可能性・才能を秘めていると考えていますので、天報星をもっている人は、何をやらせても、それなりに上手にこなします。

器用



ただしエネルギーは3点と弱いので、同時にいくつもの事に手を出すと、どれも中途半端で終わる。

たいていの物事を器用にこなせます。

種々の可能性をもっていますが、赤ん坊にも満たない胎児ですからエネルギーが弱いです。

エネルギーが弱いという質は、天報星の人が特に気をつけなくてはならない部分です。

さまざまな可能性秘めています、ほかの星に比べて、エネルギーはかなり弱いです。

人間として形成された体力がない、そういう時代の星で

ありながら器用ですから、あれをやっとうまくいった。

これもやってみたら上手に出来た。と、いくつものことに同時に手を出しやすいわけです。

ところが、そのように手を出してしまうと、結局は自分自身が息切れてしまって、どれも中途半端で終わってしまいます。エネルギーが弱いからです。

天報星は“多芸多才”とっていますが、一芸に絞ったほうがよいのです。

一芸にしばったほうが大成できる。

多芸多才ですが、一芸にしばったほうが結果的に伸びていきます。

エネルギーが少ないので、1つのことに集中したほうがよいのです。

天報星をもつ人が「伸びるのか」「伸びないのか」という境目は「1つのことに集中できるのかどうか」このことでおおかた決まります。

一芸に絞っている人のほうが、結果的に伸びていきます。

器用なゆえに、あれにも手を出して、これにも手を出してと、そのようにやっている人は、結局はどれも大したことなく終わってしまいます。

趣味でも、仕事でも、何事もそうです。

異性関係もそうです。

器用なので、相手の気持ちを引き寄せるのも上手です。

しかし、あっちと付き合い、こっちとも付き合って、ということをしていると、結局は全てうまくいかないで、終わってしまいます。

1人に焦点を合わせたほうが、結果的に幸せになれます。

⇒ ほかの時代にはない『天報星』だけがもつ特徴があるわけです。

天報星は母親のお腹のなかにいる時代ですから、母親が妊娠したときの生き方、そのときの状態がそのまま胎児に影響します。

たとえていえば古い話ですが、サリドマイド^じ児^たといいまして、お母さんが妊娠中に悪い薬を飲んだために、それが胎児に悪影響をおよぼして、身障者の赤ちゃんが生れて

来てしまった。という事件がありました。

母親のお腹のなかにいますから、お母さんが栄養失調になれば、胎児も栄養が不足します。

お母さんが、毎晩お酒飲んで酔っ払っていたら、胎児もその影響を受けてしまいます。

お母さんが悪い薬を飲めば胎児に影響します。

それとおなじことが『気』のうえで起こります。

〔たとえば〕母親の男性関係が乱れていたら、その男女の『気』がおよぼす影響が胎児に入ってしまいます。

母親の生き方が間違っていれば、その間違いが天報星をもって生まれてきた子供の人生に影響してしまうのです。

具体的にいいますと、〔たとえば〕女性が妊娠しました。

しかし、その女性は父親が誰なのかわからない。

自分のお腹に身籠もったお母さんにも、父親が誰なのかわからないという状況で、天報星をもっている子供が生まれたとします。

父親が誰だかわからない

そういう場合もあり得るでしょう。

あるいは、誰だかわかっているけど、それは不倫相手の男性の子供でした。

夫の子供ではなくて、ほかの男性とのあいだの子供です。

不倫相手との子供。

あるいは、父親は夫ですが、子供は欲しくなかったけど妊娠したので仕方なく生みました。

欲しくなかったのに、妊娠したので仕方なく生んだ。

〔たとえば〕夫婦仲悪く、別れようかと思っていたので、子供は欲しくなかった。でも妊娠してしまったためにイヤイヤ生みました。という場合も入ります。

出来ちゃった結婚ですが —— 子供が出来ちゃったわ。

^{うれ}嬉しいから結婚しましょう。これは問題ないのです。

ところが、子供が出来ちゃったから仕方なく結婚した。ということになると、そこに問題が横たわっていることもあり得ます。問題が横たわっている状況で天報星をもつ子供が生れてくると、天報星の〔子供の人生〕が曲がります。

天報星の子供の人生が曲がる。

〔子供の人生〕と書きましたが、特にその子供が結婚したときです。

先ほど^あ挙げた、好ましくない状況のいずれかの場合で、天報星の子供が産まれてきたら、それだけで子供の将来における結婚がうまくいかないと考えていいのです。

その子供の結婚に関して人生が乱れます。

そのように占ってよいのです。

最も悪いのは、母親が売春婦だった場合です。

母親が売春婦で天報星の^{じょじ}女兒が生れると、売春婦になる可能性がとても高いです。

女の子に限らず、男の子でも、それに類似した人生を歩むようになっていきます。

その意味合いからして〔結婚しないほうがよいのか——〕

〔結婚してもうまくいきません〕とはいえます。

それ以上のことについてわからないのです。

それなら〔しないほうがましなのかどうか〕そのことはご本人が決めるしかないのです。

☞ 主として結婚を例に挙げ^あましたが、結婚がダメになると、さまざまなことに波及します。

〔たとえば〕結婚がうまくゆかなくなることで、仕事にも影響するでしょう。

人生が乱れる起^き因^{いん}にもなります。

☞ 結婚以外のことは別の話しです。

天報星という星の質だけでいえば、いままで挙げたように考えられますが、人体図の星はほかにもあります。

それゆえ、結婚で人生が乱れても、“財運はすごく強い”という宿命もありえます。

宿命に（すぐれた質）あるいは（よい質）を備えているということもあります。

天報星だけが全てではない。ということです。

そこをところの考え方を間違えないで頂きたいのです。

ここでは星の1つ1つの意味合いだけを説明しています。

総合的な星の観方は、また後で勉強します。

☞ 念のために、もう少し申し上げます。

いずれにしましても、母親の生き方が問題です。

父親の生き方は乱れていても大丈夫です。

お母さんの妊娠中に、お父さんが別の女性と浮気しても、
天報星の人生に問題はないです。

母親が悪い薬を飲めば、間違いなく胎児に影響します。

父親が悪い薬飲んでも、胎児に影響しませんと、断言は
できませんけど、主となるのは母親です。

☞ つぎのような質問もあります。

「お母さんが誰と関係をもったのか、誰にも言わないで、お母
さんだけしか知らなかったとしても、悪い影響は出ますか？」

これは「気」の話ですから〔いう〕〔いわない〕は関係な
いのです。

〔いわなくても〕運気のなかに、そのときに起きた事柄
の「気」が^{さんぞん}残存します。

算命学は「気の世界」です。『気』の勉強です。

それゆえ、宿命に天報星をもっていて、その懸念のある人は母親
にきちんと^き訊いておいたほうがよいかも知れませんね。

☞ 天報星のエネルギーの使い方とかについては、この後の授業で〔身強 みきょう〕〔身弱 みじゃく〕という言葉が出てきます。

身強・身弱についての勉強をします。

そこで説明をします。

人体図の身強・身弱は、占うときに、必ず観なくてははいけない技法です。

02 頁『十二大従星表』に記載されている『各星のエネルギー』を見ておわかりのように、エネルギーが弱い星は天報星だけではなく、ほかにもあります。

天報星より弱いエネルギーの星もあります。

エネルギーが強い・弱い。

このことが（いいとか）（悪いとか）はありません。

☞ 天報星は“胎児の時代”です。

ほかの時代と比べて、どのような特徴があるのかというふうに考えてゆくと、天報星をもつ人物の性格とか、運勢などを観れるようになります。

☞ 天報星についてご説明しました。

このような考え方で【十二大従星力学】は成り立っています。

ここでの考え方に慣れていただくと、ほかの星も理解しやすいでしょう。

【初年】40回目【十二大従星力学①】 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】41回目【十二大従星力学②】です。